

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	張 又華
論文題目	認知言語学の観点から見た日本語の文法化現象 — 「テシマウ」形式を中心に—		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、認知言語学の観点から日本語の「テシマウ」形式の意味・用法の体系的な記述を試み、「テシマウ」形式の機能拡張のプロセスを明らかにすることを目的とした研究である。</p> <p>序論の第1章に続き第2章では、「テシマウ」形式が日本語学や日本語教育の関連分野においてどのように扱われてきたか、とりわけ主観的評価の用法の派生をめぐる先行研究を中心に概観する。従来の記述では、「テシマウ」形式の〈終了・完了〉というアスペクト的用法に加え、〈残念さ〉や〈解決〉、〈不本意〉といった主観的評価を表す用法が網羅的に記述されているが、実際にはアスペクト用法と主観的評価の用法の間に明確な線引きができないことを、事例の観察を通して指摘している。また、主観的評価の用法については、アスペクト的用法である〈限界達成の強調〉からの拡張として説明する研究や、本動詞「しまう」からの文法化として通時的観点から説明した研究もある。本論文はこれらの先行研究をふまえ、特に金水(2000)による〈限界達成の強調〉という特徴づけを支持しつつ、「テシマウ」形式に結合する意味を〈主観的評価が付け加えられた限界達成〉と設定する。以下の章ではこの意味設定の妥当性を実証すると共に、主観的評価の用法に至る拡張のプロセスを詳細に検討していく。</p> <p>第3章は、本論文で適用する認知言語学の理論的枠組みを導入し、図と地の分化、プロファイルとベースなど、「テシマウ」形式を分析するにあたって有用となる道具立てを提示する。また、本論文で扱う「テシマウ」形式は、本動詞「しまう」から補助動詞用法への文法化現象であるとみなされることから、文法化に連動する意味変化の要因についても述べ、以下の章での分析の基盤とする。</p> <p>第4章は、現代日本語の「テシマウ」形式が〈主観的評価が付け加えられた限界達成〉を表すという本論文の提案に基づき、この形式のもつ多様な意味・用法の記述を行っている。アスペクト的用法に関しては、動詞の表す事態の終結点の有無に関わる語彙的アスペクトとの組み合わせによって、〈終了限界の達成〉〈開始限界の達成〉〈限界達成〉のいずれかに読み取れることが示されている。また、主観的</p>			

評価の用法に関しては、文脈によって<残念さ><失望>のような負の感情評価にも、<安堵感>のような正の感情評価にも読み取れることを明らかにしている。アスペクト的用法・主観的評価の用法のいずれも、文脈との相互作用によって意味が決定されるという平行性を指摘することによって、両用法が緊密な関係にあるという本論文の見方を論証している。

第5章では、事態の終了段階を表す「スル」形式、「テシマウ」形式、「一オワル・オエル」形式を取り上げ比較し、それぞれの形式が指し示す<終わり>の違いを明らかにしている。「スル」形式は事態の終了段階に加えて開始段階もプロファイルする一方、「一オワル・オエル」形式は事態の開始段階と継続段階をベースとして含意する。「テシマウ」形式は、事態の開始段階と継続段階を捨象し、とくに談話においては終了限界を焦点化するという機能特性を明らかにしている。

第6章では、現代日本語の「テシマウ」形式が<主観的評価が付け加えられた限界達成>という意味を獲得したプロセスについて考察している。本動詞「しまう」の表す収納という行為にはモノの移動が包含されており、収納先である<到着点>を焦点化する。<到着点>は同時に行為の<達成点>でもあることから、<終了限界の達成>という時間的なアスペクトの意味が獲得される。さらにアスペクト的用法は、その適用範囲が事態の部分的なく<終わり>、事態の<始まり>、事態の漠然とした<始まり>の順で拡大し、最終的に<終わり>にも<始まり>にも特化しない<限界達成>の意味を獲得した。さらに、完了した事態の不可逆性・制御不能性に対して話者の感情評価が生じやすいため、<限界達成の強調>は主観的評価の意味合いの源でもあると本論文では考える。これは、話者の感情や命題に対する態度が言語表現の意味の一部に組み込まれる「主観化」の現象と位置づけることができる。

第7章は論文全体の総括と展望である。「テシマウ」形式に見られる意味・用法は、本動詞の意味からの拡張として連続的に捉えられ、体系的な記述が可能であることを示している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、日本語の「テシマウ」形式を認知言語学の観点から分析し、本動詞としての用法と補助動詞としての用法を連続的に捉え直した研究である。モノの収納という本動詞「しまう」の語彙的意味からアスペクト的用法および主観的評価の用法が連続的に派生したと位置づけ、「テシマウ」形式の多様な用法を体系的に記述・分析した研究として評価することができる。

「テシマウ」の用法に関しては、金田一(1955)をはじめとし、日本語学において膨大な先行研究が存在するが、本論文はそれらの先行研究を丹念に調査しまとめた上で、認知言語学の理論的枠組みを適用した分析を展開している。終了や完了といった時間的なアスペクトを表す「テシマウ」については、認知文法において提唱されているプロファイルとベースの概念や、perfective verbsとimperfective verbsの区分を効果的に導入し分析されており、前接動詞の表す事態に内在する終了点の有無と「テシマウ」との組み合わせによって指示される時間的側面が<終了限界の達成><開始限界の達成><限界達成>と変動することが適切に示されている。

また本論文は、本動詞「しまう」の語彙的意味からの拡張プロセスを詳細に検討することにより、「テシマウ」形式が<限界達成の強調>であるという金水(2000)の見方の妥当性を補強している。動詞「しまう」の語彙的意味である<モノの収納>が事態の<終了>をメトニミー的に指示するようになった可能性に加え、モノの収納場所である<到着点>が時間領域へとメタファー的に写像され、結果的に<達成点>を焦点化する機能が生じた可能性が示されている。本論文は認知言語学で提唱されている意味拡張の主要メカニズムを適用することによって、「テシマウ」形式の意味・用法の有機的な関連づけに成功していると言える。

「テシマウ」の主観的評価の用法に関して、本論文では<限界達成の強調>から派生したという見方を支持し、事態の達成に対してどのような感情評価が生じるかを状況別に考察している。主観的評価を表す「テシマウ」の用法は、認知言語学で近年注目されている「主観化」のプロセスに合致しており、理論的にも興味深い提案がなされている。さらに、話し手がどのような期待値を前提として持っているかによって否定的な感情評価の読みも肯定的な感情評価の読みも可能であり、解釈が文脈に依存し具体化されるという点ではアスペクト的用法と主観的評価の用法の間に平行性が見られるという指摘も評価に値するものである。

本論文の特長は、現代日本語の「テシマウ」形式に結合する意味が <主観的評価の付け加えられた限界達成>であるとし、アスペクト的用法と主観的評価の用法の一体性に重きを置く点にある。文脈や話者の期待に応じて異なる意味側面が前景化するというモデル化には、認知言語学の観点が有効に応用されている。<主観的評価の付け加えられた限界達成>を「テシマウ」形式の意味の主軸に据え一貫した説明を試み、多様な用法を離散的ではなく体系的に把握できることを示した労作であると言える。

さらに本論文は、豊富な実例を収集し、それらの意味を細やかに観察・記述している点でも評価することができ、申請者の卓越した日本語能力と鋭敏な言語感覚が存分に発揮されている。現在、申請者は台湾の大学において日本語教育に携わっているが、本論文によって示された知見は外国語として日本語を教授する際に様々な場面で応用可能であり、今後おおいに貢献をなすことが期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年9月2日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 年 月 日以降